



# 冬の白い花



冬木旅人

不器用な私が、針で自分の指をさした

布が赤色に染まった 涙も落ちて ゆっくり滲んだ

それでも私は刺繍を続けた

懸命に続けた刺繍は私繡となった

何回も何回も私繡を作り続けた

いつしか希望をあのからかい布に縫うことができた

そのとき私繡は志繡となった

希望はずっと私を支えた

何年も何年も私は希望に支えられた

希望がいなくなったとき、

志繡は死繡になった

たくさんの死繡が何千年も重なり続けた

死繡は史繡となった

私は繡を言葉にした

不器用に言葉にした

極めていびつだったが、

死繡は詩集となった

わたしはまた刺繍を始めた



## 詩を書こう

---

さあ、詩をかこう

鉛筆と紙でつくる自分だけの小さな世界

美しいもの

わくわくするもの

ふわふわしているもの

今まで見たことの無い景色がそこに広がっている

湧き出てくる好奇心は永遠で

自分ですら留めることができない

真実というのは

詩の中に確実に存在する

さあ、詩をかこう

## 霧と山賊

---

遠い遠い眠りから目覚めたら

白い白い霧の世界

暗い峠の高み この道を

現から消してしまうのだ

霧は雪と調和して

寂しく山を彩っている。

霧の世界でただ暮らすのは

この世で最も哀れな山賊だった。

傷つきたくない、傷つけない

それ故に彼は涙を流す

涙は雪をまた降らせいつまでも冬を終わらせぬ

霧は夜を深くして

山賊は一人、山を降りて

美しいものを見たかった。

明るいものを見たかった。

半月の照らす道に行く

言葉を器用に紡ぐことのできぬ

山賊は自分の惨めな存在を

詩にすることもできないのだ

霧はまだまだ続くのだ

冷たい風がただ吹いて

山賊の行く手をただ阻む

何千年前の誰かの痛みを

山賊はすごくわかった気がした

この旅の終わりに山賊が

最期にみるものは一体何なのであろ

## ブランコ

---

のんびりブランコゆらゆら揺れる

静かに揺れる

風に吹かれて

誰も乗せずに

辺りの空気をちょっとだけ変えて

ゆらゆら揺れる

ただひたすら

数え切れない孤独を抱えて

揺れるこのブランコが

世界でたったひとつの真実なような気がした

## 日暮れ時

---

空 未知なる空間が

赤ね色に染められて

人の夢はそこで散る

日暮れ時に生きた人々は

青い空を知らない

赤い赤い日輪が燃えるのを見るのみである

鳥が赤ね空を舞うならば

射たれて散って雲になる

のこった一羽を射落とせ友よ

## 古小屋

---

松林をぬけた

誰も気づかない

丘がある

その丘には古い小屋

がぼつんとたっている

捨てられた小屋は

老いて尚主人の帰りを待つのみ

古小屋の周りには柊が咲いていた

柊が目立たぬ小さな 白い花が雪に見える 時、

古小屋の主人は

帰還するだろう

## 小川

---

春になろうとするときに

山の雪が溶けだして

茶色の落ち葉の上を下っていく

木々から漏れるたくさんの光線によって

様々な色に彩られながら

小川の流れは急に速くなる

やがて、山を出て春を伝える

歌え旅人よ小川の詩を

## 強く吹く風

---

何千枚、何万枚もの葉が

吹き荒れる今日の日

長い旅は始まる

澱んだ空気を遠くに避けて

向かうのだ西へ

この強風は向かい風か追い風か

この谷にいっぱい吹いている

長い長い人の夢は終わることなく

ただ風となるのだ

# 大青空の如き夢

---

未知なる草原から

見える大青空は

世界の夢

爽やかなそよ風、大嵐

白い雲 黒い雲

人の夢は大青空の如し

## いつか見た雨

---

失われた光

響く水の音

静かに雨は降っている

少し寂しげに傘が笑う

うすいグレーの今日だった